

「早起大井を訪ひ、一酌して辞し去る。

転じて小倉を訪ひ、一酌す．．．」

竹外の幕末日記

藤井竹外  
藤井又一  
日記

上



藤 藤

井 井

又 竹

一 外

日

記

上





序 文 　　（刊行にそえて）

世に「絶句竹外」として名をはせた幕末の高槻藩士・藤井竹外。七字四句の定型詩「七言絶句」を得意とし、彼の作品は現在でも詩吟の世界を中心に親しまれています。竹外は漢詩に精通するとともに、鉄砲術といった武芸にも優れ、「文武両道」に長けた人物でした。彼の交友関係を見ると、儒学者の頼山陽や、陽明学者の大塩平八郎、漢詩人の梁川星巖など、江戸時代後期を代表する学者や文人らと親交を深めています。また、竹外の長男又一は、槍術にすぐれ、九州柳川藩の大島流槍術・加藤善右衛門に入門し、その後は九州各地へ武者修行の旅に出かけています。

さて、高槻市立しろあと歴史館を拠点に活動する、特定非営利活動法人 高槻市文化財スタッフの会の古文書グループのメンバーは、古文書の解読と釈文の作成を行い、これまで三冊の史料集を刊行されました。さらに、当館の特別展・企画展での史料解読や、市民に分かりやすい古文書入門教室を実施していただいています。本市の歴史を探求し、広く発信するボランティアとして活躍されています。

このたび、高槻ゆかりの人物である藤井竹外・又一親子の日記を読み解き、その人物像に迫ろうと、本史料集を発売されました。竹外の日記からは、森田節齋をはじめとする幕末の文化人や高槻藩士との交友関係が窺え、又一日記からは、九州各地における武者修行の実態や、宿場や道中の景色や食事の様子、修行先である九州各地での人々との交流などを窺い知ることができます。本史料集が、幕末史研究や地域史研究の一助になることを期待いたします。

平成二十七年三月





(下巻目次)

藤井又一日記

修行廻国中日録

積文・読み下し

補注

記録

積文・読み下し

補注

槍術稽古志録(参考資料)

積文

付録

略年譜

修行廻国経路図

あとがき

扉写真 竹外の印「三百六十日酔」

はじめに — 竹外親子の日記を読む —

## 藤井竹外の日記と又一の日記

この度は、所蔵者である藤井家のご厚意で、藤井竹外と又一の日記に取組みました。幕末の高槻藩士藤井竹外の名は、『芳野』の詩で広く知られています。漢詩を作るといふ文芸の形式に、かつての勢いはないでしょうが、読んだり吟詠したりという形での愛好者は、今でも多数おられるようです。少し前、ある詩の雑誌で漢詩の人気投票を行ったところ、『芳野』は頼山陽の『題不識庵擊機山図』（鞭声肅肅夜過河・・・）と同数の票を集めて、日本の漢詩のベスト3に入りました。竹外作品は全国区で人気を得ているのです。

ところが竹外の人となりについては、奇行と酒にまつわる若干の挿話が伝えられるのみで、あまり知られていません。淀川の風光をうたう数々の佳吟を残し、当時一流の知識人たちと交流のあった竹外が、単なる奇人である道理がありません。このささやかな冊子を編んだ原動力は、竹外の素顔に触れたい、多くの皆さんにも触れて頂きたいという思いです。

### 【藤井竹外日記】

『藤井竹外日記』は、罫紙でわずか九枚の短い史料です。高槻市立しろあと歴史館の図録『高

槻が生んだ幕末の漢詩人 藤井竹外』(平成十七年発行)にも『藤井竹外日記』として紹介してありますが、その内容は通常の日記と違い、長男である藤井又一の、安政二年(一八五五)から安政六年(一八五九)に至る槍術修行の顛末の記録です。ただし、又一自身の行動に触れる記事は少なく、安政二年の又一出発前後の記事と、安政六年の又一帰郷前後の記事が主で、南九州・北九州への旅にわずかに触れるほかは、修行の内容は省略に任せています。乾いた簡潔な文体で、眼前の事実を淡々と記すだけですが、何度も読み返していると、竹外をめぐる興味深い事柄が浮かび上がって来ます。

その第一は当時の高槻藩の雰囲気です。安政二年の「(当藩は)ご多事・ご人少で、(又一が)いつお召出しになるか判らない」という大目付の言葉や、安政五年の「外国船への対応のため、諸大名に京都・大坂・兵庫・堺の警備が指令された。又一を呼び戻す時期が来た」という竹外の記述からは、日米和親条約の締結(一八五四)から安政の大獄(一八五八〜九)に至る時期の、緊迫した空気を感じ取ることができます。

第二は又一の武者修行に関する綿密な相談です。その顔ぶれには関(竹外の父の実家)・福山(竹外の妻の実家)・豊田(竹外の長女の嫁ぎ先)など、親族の苗字が頻出します。家の存続を重視する彼らにとって、身内の結束が何より大切と考えていたのでしょう。また、重職者との接触の記事が散見されるのは、父親が用人を勤めた藤井家の家格を反映するものなのでしょう。

第三は山陽門下との交流です。文人としての活動に関わる記事は少ないのですが、それでも森田節斎・後藤松陰との交遊の記事があり、又一の日記には、延岡で牧文吉を訪問する記事が見え

ます。それらの交流は、生活の大切な一部分であったのでしよう。

その外に印象的なのは日常の細かい気配りです。世話になった大坂の幕臣たちの家に礼を言いにいき、又一が身を寄せた備中玉嶋の人々に贈り物をし、のちに藩から拝借金（記事に欠落があつて名目は定かでないが、又一に関連するもの）が下げ渡されると、重職の家に軒並みお礼に廻つていきます。折にふれて宴席を設けて、親戚や知友との社交を欠かさないのも、気配りの表われでしょう。

又一にも気を遣います。人前で恥ずかしくないように差料の刀を送り、手元に金がなければ硯を売って送金するなど、百五十石の上士の家とは言え、仕送りはかなりの負担であつたことがうかがえます。ところが、又一の日記によると、道場の友人達との酒盛りに明け暮れており、「時代は変わつても、親の苦勞は変わらない」と共感を覚えてしまうのです。

積文のみを収めた『鎧術廻国修行便覧』は、槍術修行のガイドブック。城下町ごとに、藩主の名・道場主の名・修行者宿や名所旧跡まで記載した行き届いた資料です。筆跡や日付から、又一出発の際に竹外が渡したものだと思われ、行間からは「色々なものを見ておいで」という父親の思いがにじみ出ています。

【藤井又一日記】

『藤井又一日記』は、藤井竹外の長男又一が、筑後柳川の加藤道場や九州各地の道場で修行した期間の日記です。しかし、そういう名称の日記が存在するのではなく、『槍術稽古志録』『修業廻国中日録』『記録』の三冊の自筆の日記を、本書を編むにあたって仮に総称して名付けた書名です。三冊のうち武者修行の様子を記して興味深い『修業廻国中日録』と、又一の気持がよく表れている『記録』の二冊は釈文と読み下しを収め、内容を解明できない部分の残る『槍術稽古志録』は、巻末に釈文のみを収めました。

『修業廻国中日録』の前半は、安政四年十月から十二月までの南九州道中記です。宿場や街道の様子、行く先々の城下町での他流試合の様子が記されていて、武者修行の実態を知る好個の史料です。語彙はまことに少なく、副詞は「甚だ」「大いに」の二つだけ、形容詞は味覚を表す「味也」「明也」と景色を表す「宜敷」のわずか三つと言っている程ですが、月並みな美文で文章を飾ることなく、自分の言葉で簡潔に記述しているので文意は明瞭です。しかも天性の快活さのせいか、雨の山中をはだして歩いたり、寒く汚い宿に泊まったり、決して愉快ではない体験をしても、酒を飲んで一晩寝れば忘れてしまう姿は痛快です。強い相手と立合った後は、決まって「俺の方が強かった」と書いているのも微笑ましく感じます。

『修業廻国中日録』の後半は、安政五年四月から五月までの北九州道中記です。武者修行の内容は前半と変わりませんが、長崎訪問の記事が目を引きまします。長崎到着の日には高台から幕府蒸気船の出港を見送り、翌日には小舟で湾内を回って、出島・湾口の砲台群・飽の浦の長崎溶鉄所



(のちの長崎製鉄所)などを見物しています。

このとき又一が眼前に見たのは、日本が富国強兵・殖産興業へと向かい始めた現場。数年後には槍術など前代の遺物と化してしまふのです。最新の軍事技術を素直な驚きの眼で眺める又一の姿は、歴史の中の人間を体現して印象的です。

『記録』は『修業廻国中日録』に連続する、安政五年五月から九月までの日記です。柳川の加藤道場での修行の日々が綴られますが、竹外から帰国を命ずる手紙を受取り、慌ただしく準備をして高槻に出発する前日の記事で終わります。その竹外の手紙は、『藤井竹外日記』に記載したものである点にも注目して下さい(七十三頁参照)。また、短い間に大水・竜巻・地震などの天災、コレラの流行、将軍家定薨去に伴い槍術の稽古を自粛するなど、当時の世相を伝える記事が豊富で、史料として高い価値を持っています。

『記録』の締めくくりに、終り近くの一節を読んでみましょう。

精(晴)天、今日高槻の御政(祭)にて、心祝に伊勢屋において我壺人酒飲。(安政五年八月二十五日)

高槻藩租を祀る永井神社の祭礼の夜、又一は遠い柳川で旅情に誘われるまま、故郷の人々を偲んで酒杯を傾けたのです。青年期に親元を離れたことのある者であれば、誰にも覚えのある感傷

ではないでしょうか。

釈文のみを収めた『槍術稽古志録』は、又一の日記として最も先行するもの。日記として始まり、途中から『修業廻国中日録』の記事と重複しながら備忘的な記述をして、突然終わります。一部に重出や前後の混乱もあって、内容の解明は我々の手には余るようです。

頼山陽や梁川星巖に師事し、頼三樹三郎や森田節斎と親交のあった竹外には、明らかな尊王攘夷思想を窺わせる作品もあるのですが、高槻藩士としての穏健な生き方を選び、京都三本木の山陽旧居の側で平穏な晩年を送って、慶応二年（一八六六）に世を去りました。

又一は、武の人として幕末の動乱を生き抜き、大正四年（一九一五）に長い生涯を終えました。二人の墓は、高槻市大手町、日蓮宗本行寺の日当たりのいい墓地に並んでいます。

## 史料のあらまし

### 【藤井竹外日記】

（装丁） 罫紙を紙縫りで袋綴。表紙なし。

（本文） 半丁（十二行）二十三・一cm×十五・八cm九丁。墨付九丁、貼紙一枚。無題。

(著者) 藤井竹外

(内容) 長男又一の、槍術修行出発と帰郷に関する記録(安政二年三月～安政六年六月)。  
(所蔵) 個人蔵、高槻市立しろあと歴史館に寄託。以下全て同じ。

【鑓術廻国修行便覧】

(装丁) 白紙を紙縫りで袋綴。

(表紙) 十二・四cm×十六・六cm。外題『安政二乙卯歳四月／鑓術廻国修行便覧』を墨書。白紙裏表紙あり。

(本文) 十九丁、墨付十九丁。半丁に九～十四行記載。内題なし。

(著者) 藤井竹外

(内容) 中四国・九州での槍術修行の資料(城下町・藩主の名・槍術師範と流派・修行者宿等を経路順に記載)。竹外が作成して、出発時に又一に与えたものか。又一の九州での実際の武者修行経路とは、一部不一致。

【修業廻国中日録】

(装丁) 罫紙を紙縫りで袋綴。

(表紙) 八・二cm×十八・四cm。外題『安政四丁巳／修業廻国中日録／十月』を墨書。裏表紙なし。

(本文) 半丁十三行三十四丁。墨付三十四丁。内題なし。

(著者) 藤井又一

(内容) 南九州・北九州の槍術修行道中記(安政四年十月～安政五年五月)。

### 【記録】

(装丁) 白紙を紙縫りで袋綴。

(表紙) 十二・五cm×三十三・五cm。外題『安政五年／記録』を墨書。白紙裏表紙あり。

(本文) 七丁、墨付七丁(七丁裏は白紙)。半丁に二十五～二十九行記載。内題なし。

(著者) 藤井又一

(内容) 筑後柳川加藤道場での修行日記(安政五年五月～同年九月)。修行を終えて柳川を離れる前日の記事で終る。

### 【槍術稽古志録】

(装丁) 野紙を紙縫りで袋綴。

(表紙) 八・二cm×十八・三cm。外題『安政四已歳／槍術稽古志録／正月柳河藩加藤善右衛門先生塾』を墨書。裏表紙に『安政四已歳正月／槍術稽古志録／筑後柳河藩加藤善右衛門先生江入塾中／藤井又一貞臣』と墨書。



(本文) 半丁十三行十三丁、墨付九丁(十～十三丁が白紙)。

(著者) 藤井又一

(内容) 又一の日記としては最も先行するもの(安政四年一月～同年十二月)。はじめは加藤道場での稽古を記しているが、南九州武者修行の間は、手強い相手の氏名のみを記載しており、『修業廻国中日録』の記事と対応する。

## 凡例

### 【積文】

- 一、積文にあたり、資料の体裁はできるかぎり原本にしたがった。
- 一、外題（または仮題）ごとに、原本の丁数を（001）表・裏と示した。
- 一、本文の字体は原則として常用漢字を用い、俗字は正字に改めた。
- 一、文書を読みやすくするため読点「、」及び並列点「・」を適宜いれ、闕字は一字あけとした。
- 一、変体がなは平がなになおし、片かなはそのままにした。
- 一、合字である「ㄋ」（より）はそのまま使用した。
- 一、助詞の「与」・「茂」は「と」・「も」、「乃」は「ノ」とし、「者」・「而」・「江」・「ニ」・「へ」はそれぞれ小文字で表し、右に寄せた。
- 一、原本の「斗」は、（はかる）と読む場合は「計」とした。
- 一、抹消文字は  としたが、判読できる文字は見せ消しとして、 を該当文字の左側に示した。
- 一、綴代・虫損・汚れ等で、判読できない箇所は字数分を□とし、字数がわからない場合は「」とした。文字によっては原字をスキヤンしたものもある。その他誤字や脱字と思われる箇所には適宜（ママ）（カ）（脱カ）とした。

- 一、本文上欄には、主な事柄についての註釈・引用を記載した。

#### 【読み下し】

- 一、適宜に段落を設け、句点・読点を付した。原文の月日の表示は不統一なので、統一した。
- 併せて一日ごとに改行し、月の変わり目は一行空きとした。
- 一、割注は「」内に記入した。
- 一、漢字は固有名詞以外は原則として常用漢字を用い、常用漢字のないものは正字を用いた。
- 一、難読と思われる漢字には、適宜にふりがなを付した。
- 一、漢字は読み易さを考慮して、適宜に平がなに改めた。
- a 合字である「ㄋ」は「より」とした。
- b 助詞の「江」「而」は「へ」「て」に改めた。
- c 「候得共」は「候へども」に改めた。
- d 「之」は文意に応じて「これ」「の」とした。ただし語調を整える「有之」「無之」は「あり」「なし」とした。
- e その他、「其」を「その」、「且」を「かつ」とする等、適宜に書き改めた。
- 一、読み易くするため、適宜に助詞を補い、送りがなを付した。
- 一、文中の片かなは、基本的に平がなに改めた。

- 一、かな使いは、基本的に歴史的かな使いとしたが、原文が歴史的かな使いでない部分は原文通りとし、該当部に傍線を付した。
- 一、屋号や書名は『』で囲み、会話は「」で囲んだ。
- 一、地名「柳川」と「柳河」が混在しているので、「柳川」に統一した。



藤井竹外日記

写真版

积文

読み下し

大意

補注



史君在城見  
其子一書

安政乙卯晚春十日森田節高為之玉為 勲功  
 本訪送張、寫了了數。一、市相飲、等了了  
 忽也、許、貞后、後街、備行、任、中、國、九  
 州、連、應、を、吃、了、玉、の、交、農、中、京、久、次、一、除、  
 手、新、費、を、辨、也、了、了、云、在、座、者、福、山、  
 三、卯、一、七、四、大、根、即、上、高、節、高、節、高、節、高、  
 の、為、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、  
 竹、井、之、為、卯、一、七、四、大、根、即、上、高、節、高、  
 四月五、勢、貞、臣、日、り、  
下、江、之、を、了、了、了、了、  
 三、卯、一、  
二、  
三、  
 伊、太、甘、能、透、大、井、太、一、  
二、  
三、  
 門、省、規、也、即、一、  
二、  
三、



<p>廿三日 福山侯留主居小倉邸用人一書杖持      参言又一以傍用去</p>	<p>廿五日 寺一系 表 寺 寺</p>	<p>廿六日 小倉氏 言 雅 究</p>	<p>廿七日 言 田 福 山 高 階 通 又</p>	<p>廿八日 又一 風 邪 二 牌 三 五 埋 堀 打 核</p>	<p>廿九日 同 此 夜 表 表 三 神 小 在 思 敲 翻 侍 者 寺 表</p>	<p>五月</p>	<p>朔</p>	<p>十日 坊 藤 氏 物 別 後 岡 氏 宿</p>	<p>十六日 相 借 合 子 口 四 也 卜 為 表 高 田 母 馬 三 也 人</p>	<p>十七日 山 中 言 長 松 井 松 井 同 同</p>
--	----------------------	----------------------	----------------------------	-----------------------------------	--	-----------	----------	-----------------------------	--	--------------------------------















喃時君氏と訪之入公日と出亦未歸  
訪し大井を訪ふ、亦立て水もあらず  
一泊。

七・小雨

早急の君主人に投宿主人の口午也亦取  
而尔去喃時再來を約し至喃時  
予再來主人の口午也亦取大井  
招て來し已に宿し

早起大井を訪一泊、亦未歸  
訪一泊、亦未歸、  
少急、庭下、

九日雨



美水通善く為実念く、其價を常々東西に  
てし、其れ多敷く

七月

六〇ノ新所 櫻 玉の、一系持多て子孫に  
其れ多敷く二内君一、其れ著く、一甲亦也一、其れ一  
此れ小倉ト富士野ト、二亦多て其れ福ん、白印又一  
く書一、其れ多敷く、即ち福山英長田、其れ報又并  
神名也

七日

新所 其れ多敷く、其れ福也、其れ招也

廿日

其れ山、其れ多敷く、其れ一、其れ其れ、其れ原、其れ其れ、其れ

又一日七月二日妻以急以美之付テ、報テリ

福山長田、一書来、金柳河の石一付

二君より徳方北七合を送リ、越テリ

廿一日又申卯合子五兩打糸 外方より来リ也

一月

六日

信ヲ玉崎、通リ

一書 口舌折半介  
一書 琴女史、

森田節之而

一書 七ウカ木綿二端  
金唐革

森田保董

一書 山陽省抄物

中原久次

一書 五色氷内袴

小野近左

一書

長岡宗平





全五頁

下年三月廿七日

全六頁

右年八月也

全五頁

下年三月廿七日

全五頁

下年三月廿七日





夷船一、条、行、六月、止。事師、在、改、兵、庫  
 得、(、) 法、(、) 行、(、) 之、(、) 之、(、)  
 又、一、引、(、) 之、(、) 期、(、) 之、(、)  
 七月、十六、日、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 八、九、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 口、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 十七、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 十八、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 平、部、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 土、月、廿、六、日、又、一、出、世、蘇、江、(、) 之、(、)  
 蘇、江、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)  
 己、未、二、月、一、書、(、) 之、(、) 之、(、) 之、(、)



墨田準	秋野勘次郎	桑平即	小倉孫男
杉原西多	十津井孫吉	市村健郎	杉浦嘉一
市村謙郎	田宮四郎	中込匠助	
田宮良吉	杉本良光	高森直一	尾崎貞三
和田泰吉	幸危康三郎	善光	山花
十八日	十九日	諸人ヲ供ス	
和久安	墨田新	辭	福山段即乘
廿三日	廿四日	又一引取ラ告ル	
又一所推カ			
加藤翁目錄印可	卷一	集名録	
九州圖	加藤翁書	節齋夫婦書	
五十川卓助書	東馬安太郎書		





○安政乙卯晩春  
安政二年（一八五五）  
三月

○森田節齋↓補注①

○玉嶋  
備中浅口郡玉嶋村  
現岡山県倉敷市内

○挈家↓家（か）を挈  
（けつ）して  
妻を伴って

○貞臣↓補注②

○岡渡・大井良之助  
幕臣、大坂定番の与  
力

(001)表

安政乙卯晩春十八日、森田節齋「玉嶋挈家

来訪、逆旅ニ寓する数日一日予招飲、節齋

忽然予ニ許ニ貞臣鎗術脩行任意ニ中国・九

州へ遊歴を以てす、玉嶋豪農中原久次ニ謀而

其雑費を弁せしむると云々、在座者福山繁

三郎・長田大次郎 廿四日節齋辞去赴玉嶋

○数日之後、予之を関半助・田宮良吉・福岡保左衛門・

竹井藤四郎ニ告、及宇野謙三

四月五日、携貞臣 同行葉野 市太郎 下江、之を岡渡・大井良

之助ニ両欣躍賀之 告人 波多野生在和州云々 〇北厚ニ告 〇之を知る者岡石

之助・大井佐逸・大井常二助・宮津藩士山崎左右馬・膳所藩士

門間虎太郎 居五日ニして帰る、貞臣

繼而帰る

（上欄外）

一（初）

小倉始見

琴子之書

ヲ授

┌

○二円二方

二両二分

○髭人参

強壯漢方薬、朝鮮人参(ウコギ科)の髭根

○貞元

竹外の次男

○玉造鉄砲御覧

「玉造」は大坂城玉造口守備の大坂定番。この頃、幕府は軍制を改革し、幕臣の洋式訓練を実施。

○鵬庵

森田鵬庵(一八二六一—一八八八)。節齋の弟。

○モ一カ綿布

真岡綿布

(001)裏廿日 晴、窃ニ予ヲ書屋ニ来会シ而勸離杯者、福山繁三

郎・長田大次郎・関半助・宇野謙三 福山・宇野酒肴之餞あり

廿一日 晴、携貞臣田宮良吉を訪、其別院を借候事

警戒を加ふ、竹井藤四郎肴を携而追到

廿二日 晴、貞臣託事於岡氏之報発高槻、予預

酒肴を設而窃ニ傾離杯、貞臣ニ授るニ金二円二方

其他薬品 奇應丸・薄荷 関 福山 之類 ○餞別、一方・二方

髭人参 長田・酒三升卵十 田宮・烟管 福岡

廿四日 晴、金平 貞元始而下江、到岡氏習鎗術、予送而

到前嶋、即夜藤四郎ニ命し乗船到浪華

廿八日、藤四郎引取 以下藤四郎之話を豫ス(ママ)

廿五日 者玉造鉄砲御覧ニ付、廿六日ニ岡・大井

(上欄外)

「書翰・烟管

節齋へ

書翰・綿布 詩一首

琴子へ

書翰・書幅

鵬庵へ

右

托貞臣



○廿三日  
安政六年（一八五九）  
四月か

○錯濫献酬  
泥酔するほど酌み交  
わす

(002)表廿三日、福山侯留主居小倉□用人之書状持

参<sup>ニ而</sup>、又一御借用之々<sup>云</sup>

廿五日、右之一条和久より承ル

廿六日、小倉氏<sup>ニ而</sup>推究

廿七日、高田・福山・高階へ通ス

廿八日、又一風邪瘳ルを以始<sup>而</sup>打槍

廿九日、同此夜春<sup>ニ而</sup>二郎卜錯濫献酬、侍者小森  
於鈴木氏

五月

朔

十一日ヨリ指療治之為出坂、岡氏<sup>ニ宿</sup>

十六日、拝借金子内聞込之為不知、高田来ル酒ヲ出ス

十七日、田中・片岡・松井へ挨拶<sup>ニ廻ル</sup>

○割元  
大庄屋

○片岡源太左衛門  
高槻藩中老

○旧冬  
安政五年（一八五八）  
冬

(002)  
裏

十八日、金十五兩割元<sup>ニ</sup>而受取、御沙汰有之

節上納ト云々

六月十日、片岡源太左衛門より呼<sup>ニ</sup>「」

書状二通示し被申、一通<sup>者</sup>福山藩

より又一再逗留頼み之状、一通

わ其返書也

福山書状写し

一筆致啓上候、春暖御座候処、各様弥御堅

固被成御勤珍重存候、然<sup>者</sup>其御藩藤井

又一殿、旧冬為槍術御修行、従九州

御帰路御立寄被下候処、当藩槍術

修行之者一同御同人<sup>江</sup>随い、此節迄

○淀屋橋  
大阪府大阪市中央区  
北浜の一部。淀屋橋  
南詰付近は大川町と  
呼ばれ、西国への便  
船の船宿が並んでい  
た。

○舟生洲（ふないけ  
す）  
屋根船を並べて料理  
を食べさせた所。一  
艘で調理し、他の一  
く三艘を仕切つて客  
席とした。

○梅肉息合イ  
息合の葉（息を整え  
るのに用いた葉）  
米の粉と氷砂糖の粉  
末を梅肉で練つたも  
の。

(003)表 留別ニ淀屋橋舟生洲網彦ニ而一酌、其夜

より船中ニ一宿、藤四郎側ニ侍ス

廿七日 晴、折節客少きニより舟発する遅

き故ニ藤四郎辞去九ツ時前、舟宿多田新

岡氏餞別 梅肉息合イ 瓶共 血止 百錢五

煮豆 大井氏<sub>者</sub>木綿一端

五月

二日、未刻大目附中呼ニ来候故罷出ル、中村助次郎

部屋之外ニ而ひそかニ申候わ、又一殿最早出

仕之年齡、且此頃御上御多事ニ而御人少故ニ

(003)裏 何時御召出しニ相成候も難料候、あらかしめ御目

○吉郎  
竹外の通称

○ウツロイ  
(動詞「うつろ・ふ」  
の連用形から) 状態  
が変化していくこ  
と。

見へ相済不申候<sup>而者</sup>御召出しニ難相成候、

右<sup>ニ</sup>付御家老中より内々吉郎へウツロイを申

置へく、吉郎別段存し寄も無之候ハ、

来ル端午<sup>ニ</sup>御目見へト云々、予答て曰、忤從

来武芸稽古十分<sup>ニ</sup>致し居候故、御目見へ<sup>者</sup>遅を

要し候得共、是迄御上御無事之時共違ひ候故

残念<sup>ニ</sup>わ存し候得共、御請を仕候ト、予早速引取

其義を家内<sup>ニ</sup>告、偶藤四郎来る故<sup>ニ</sup>又告ル処、

金平自浪華帰来、又一<sup>実者</sup>廿九日<sup>廿七日</sup>発船之義を

具<sup>ニ</sup>告ル、且廿九日又一并<sup>ニ</sup>岡より書状<sup>ニ而</sup>

報し候其書到着否ト問、其書未た到着

(004)  
表  
無之<sup>ニ</sup>因り、即時中村助次郎宅へ参り候<sup>而</sup>、

(上欄外)

「和田之叔母

亦偶到

」

○豊田準  
竹外の長女浦の夫

又一廿九日ニ備中へ赴ク為ニ浪華発船、且

兩人書状を差出し候得共未着趣金平

より承知之由申演ル、尤七月之内ニ引取候

趣故、御上之御用を欠候事ニ無之候間、

吉郎即時御請ハ仕候得共、其義<sub>者</sub>御引

直し被下、御目見へ之義暫時御猶予被成下

様ニ御取繕可被下ト相頼候処、助次郎承

申吳ト

知ス、其夜関半助を□田準宅へ呼、  
(豊カ)

三人密議 福山繁三郎有障不到

三日

早朝福山氏へ遇て委細を話ス、<sub>乍併</sub> 兩人

(004)  
裏  
之報書未た到来無之ニ付、金平ニ命し其

書を吟味之為再浪華へ遣し候<sup>而</sup>、爾後

相発前嶋へ到る、折節飛脚萬佐自

浪華引取、彼書を金平へ相達候<sup>ニ</sup>付、

金平即時自前嶋引取、予亦即時其書

を福山氏へ示し、兼<sup>而</sup>中村助次郎へ示し其

確然たるを知らしむ

五日 晴

午前予下江、岡・大井二子を謝セんとす、

晡時着岸、其夜後藤世張を訪、檜皮屋<sup>ニ</sup>

宿

六日 陰晴

(005)表 晡時岡氏を訪、主人公用<sup>ニ</sup>而出勤未帰、

○晡時  
午後四時頃  
○後藤世張↓補注④

転し而大井を訪、又々不在、其夜岡ニ而

一宿

七日 小雨

早朝岡主人ニ挨拶、主人今日亦出勤故

予亦去、晡時再来を約し置、晡時ニ至

予再来、主人亦帰宅浴後対酌、大村井ヲ  
招キ来る、岡ニ宿す

八日 雨

早起大井を訪一酌辞し去、転し而小倉ヲ

訪一酌、其夜檜皮屋ニ宿  
小倉ニ短刀ノ製ヲ  
托ス

九日 雨

(005)  
裏  
早起再小倉を訪、刀を玉嶋ニ送る事を

○辰牌  
辰の刻  
○龜山  
丹波龜山藩↓補注⑤

○したみ  
(動詞「した・む」)  
荷造りをする。

○詩礎階梯(しそか  
いてい)

江戸時代後期の漢詩  
作成の手引書。三国  
幽眠著。

○衡山詩抄(こうざ  
んししやう)

漢詩書  
著者 文徵明

○今四家絶句(こん  
しかぜつく)

江戸時代後期の漢詩  
集。市河寛斎・菊池五  
山・柏木如亭・大窪詩  
仏の絶句各百首を収  
める。

○鉄兜  
河野鉄兜(一八二五  
〜一八六七) 江戸後  
期の漢詩人

謀る、辰牌後乗船、未牌後前嶋ニ着

六月

中旬ニ至り、又一ノ信未た到来無之ニ因り一書ヲ送り度、

且差料ノ刀拵へ出来候故玉嶋へ遣し度、龜山

御用達西垣民助へ相頼ミ差出ス、小倉宇兵衛へ向

持参候様 飛脚 萬佐 申付ル、小倉刀をしたみ候而

西垣へ持参之都合也、相副ル品 手紙二本 序ノ料紙 刀拭之紙 服当

作詩之書 詩礎階梯外ニ二種 鉄兜ノ跋草稿三篇ハ手紙へ  
衡山詩抄下・今四家絶句ニ

封し入ル、十六日早朝也 玉嶋飛脚渡辺橋北詰 出日ニ・七堺喜

小倉右之品を受取西垣へ持参、西垣即其君之

御用ニ仕立、廿三日玉嶋飛脚堺喜へ相渡ス、廿八日ニ

(006) 表着相違無之旨受合イ、其価金壹分、右西垣



○葆庵  
鵬庵に同じ

より申来ル、差遣ス

七月

六日夕、飛脚<sup>松源</sup> 玉嶋之一封持参ス、開封之所

節齋<sup>書二</sup> 内君<sup>一</sup> 葆庵<sup>書一</sup> 中原<sup>書一</sup> 書一

外<sup>ニ</sup>小倉卜富士野行之<sup>二</sup>封有之、早々届ル、勿論又一

之書一封有之、即時福山・関・長田へ報ス、竹井・

福岡モ

七日

福山・関  
藤四郎 来、夕方福山・関ヲ招飲

廿日

森田節齋手紙、又一手紙、松源相届ル、

(006)  
裏 又一刀七月二日無恙着<sup>ニ</sup>付其ノ報ナリ、

○山陽翁  
頼山陽（一七八〇～  
一八三二）  
江戸時代後期の儒学  
者。竹外・節齋の師。

福山・長田へ一書来ル、愈柳河之行有之候<sup>ニ</sup>付、

二君より餞別として金を送り候趣ナリ

廿八日、関半助金子五両持参  
外方より取り替候由

八月

六日

信ヲ玉嶋へ通す

一書 正喜撰半斤  
一書 琴女史へ  
森田節齋

一書 モウカ木綿二端  
金唐革  
森田葆庵

一書 山陽翁掛物  
中原久次

一書 五色氷沙糖  
小野延太

一書  
東間宗平

一書  
又一

(007)  
表

右二包<sup>ニ</sup>致し藤四郎シタム、其夜萬佐<sup>ニ</sup>命シ

西垣氏<sup>ヘ</sup>為持遣ス

八日

西垣氏受取書来ル

九月

十八日

玉嶋より又一書到来

(貼紙)

(ママ)

「口上届振

私忤又一鑓術執心<sup>ニ</sup>付、

田沼玄蕃頭様御組与力

岡渡方<sup>江</sup>修行<sup>ニ</sup>差遣

○田沼玄蕃頭  
田沼意尊(おきたか)  
(一八一九〜一八六  
九)  
遠江相良藩主。当時  
大坂定番

○辰年  
安政三年（一八五六）

○大江村  
備中後月郡大江村  
現岡山県井原市内  
節齋は安政三年の一  
時期、同村の谷禎太  
郎の茶寮に逗留し  
た。

○安政四年巳十月廿  
五日  
この記事は、『修業廻  
国中日録』（本書下巻  
所収）の記載内容と  
一致する。

置、逗留中渡相談も

御座候者、折々他向近国江も

罷出修行為致申度

奉存候、此段御届申上候  
」

(007)裏  
金五両 辰年 大江村谷禎太郎方出ス

金六両 辰年 八月出ス

金五両 辰年 十二月出 巳年二月柳川へ着

金壹両一分 同四月 硯ヲ売り其代を遣ス

(008)表  
安政四年巳十月廿五日、信田衛門助・松井

○同五年四月六日  
この記事も、『修業廻  
国中日録』の記載内  
容と一致する。

惣兵衛同道<sup>ニ而</sup>柳川出立、肥後隈本・日向

延岡・高鍋・飢肥・清武<sup>ニ而</sup>試合、薩州

路<sup>ニ</sup>掛り肥後<sup>へ</sup>出、人吉<sup>ニ而</sup>試合、十二月

四日無滞柳河<sup>へ</sup>引取候由、申来ル

右之書十二月廿四日着

同五年四月六日、平部貞一・神谷空同

道<sup>ニ而</sup>出立、久留米より肥前佐賀・鹿

嶋・諫早・嶋原・大村・平戸・唐津卜筑

前福岡遍歴、長崎を見物、五月

十八日柳河<sup>へ</sup>引取候由、申来ル

右之書六月廿七日来ル

(008)  
裏  
夷船ノ一条<sup>ニ</sup>付、六月廿一日京師・大坂・兵庫・

京師・大坂・兵庫・堺  
之警衛↓補注⑥

○加藤翁↓補注⑦

○藤江  
備後沼隈郡藤江村  
現広島県福山市内

○己未  
安政六年（一八五九）

堺之警衛諸侯被仰付候義有之候ニ付、

又一引取らせ申候期ト存し候

七月十六日、引取雜費金六両柳川邸へ

八蔵ニ命し遣ス

同夜、鈴木呼寄セ相談之所、同意

十七日、長田・関呼候<sup>而</sup>申聞セ候所、亦同意

十八日、又一及加藤父子・谷川・安部・信田・

平部へ一書を遣ス、加藤翁之書札を乞

十二月廿六日、又一書状藤江より到来、十二月朔日

藤江森田迄落着候由

己未二月一書到、旧年十二月ヨリ福山藩

(009)  
表  
之招ニ応し城下ニ滞留

○因州藩  
因幡鳥取藩（池田家）

○民太郎↓高階民太郎、後の高階春帆（漢詩人）

三月<sup>ニ</sup>一書到来、福藩より八人扶持賜

る云々

三月十九日一書到来、命<sup>ニ</sup>随い来四月朔<sup>一日</sup>

出船引取可申卜

三月十三日一書到来、因州藩并勝山・松山十一人

福藩へ来、幾田武之進卜試合云々

同十六日一書到自浪華、昨十四日着坂、

寓岡氏、十八日以為帰期

右書状到来<sup>ニ</sup>付、為被知候人 竹井藤四郎

八蔵

鈴木久太郎 同春二郎 長田大二郎 福山繁三郎

高田久右衛門 和田拙斎 高階敬山 同民太郎

(009)<sup>裏</sup>  
豊田準 和久勘兵衛 関半助 小倉藤左衛門

○市村謙一郎  
後の市村水香（漢詩  
人）

猪瀬浅右衛門 小森熊吉 市村謙一郎 杉浦嘉一

市村謙一郎 田宮四方助 中沢清朔

田宮良吉 杉本退蔵 斎藤有二 尾崎貞三

和田泰吉 京屋□三郎 善吉 嘉六  
正蔵

十八日、 十九日、 諸人ヲ供ス

和久安 豊田邦 静 福山段之助来

廿三日、 井口大二郎（又一引取ヲ告ル

又一 所携

加藤翁目錄印可 各一卷 英名録

九州函 加藤翁書 節斎夫婦書

五十川卓助書 東馬安太郎書



## 読み下し

(注) 原史料には時間的な混乱が見られるので、錯簡と解して、読み下しでは第二丁を第九丁の次に移した。脱落があるためか接続が不自然であるが、大きな混乱は解消したと考える。(福山藩の書状以降の部分は散逸したと思われる。)

### 安政乙卯晩春十八日

森田節齋「一玉嶋、家を挈(けつ)して来訪す。逆旅(げきりよ)に寓する数日、一日予招飲す。節齋忽然予に許すに、貞臣槍術修行、任意に中国九州へ遊歴を以てす。玉嶋豪農中原久次に謀つてその雑費を弁せしむると云々。座にある者、福山繁三郎・長田大次郎「二十四日節齋辞去し、玉嶋に赴く」。

○数日の後、予これを関半助・田宮良吉・福岡保左衛門・竹井藤四郎に告ぐ。及び宇野謙三。

### 四月五日

貞臣を携して「同行葉野市太郎」下江し、これを岡渡・大井良之助に告ぐ。兩人欣躍して賀す。

【原注】小倉初見、琴子の書を授く。

○北厚二〔波多野生和州にありと云々〕に告ぐ。○これを知る者岡石之助・大井佐逸・大井常二・佐伯元太郎・宮津藩士山崎左右馬・膳所藩士門間虎太郎〔居五日にして帰る。貞臣継いで帰る〕。

二十日 晴

窃（ひそか）に予を書屋に來会して離杯を勧むる者、福山繁三郎・長田大次郎・関半助・宇野謙三〔福山・宇野、酒肴の餞あり〕。

二十一日 晴

貞臣を携して田宮良吉を訪ふ。その別院を借り候こと警戒を加ふ。竹井藤四郎肴を携へて追つて到る。

二十二日 晴

貞臣、事を岡氏の報に託して高槻を發す。予あらかじめ酒肴を設けて、窃に離杯を傾く。貞臣に授くるに金二円二方、その他藥品〔奇応丸・薄荷の類〕。

○餞別 一方〔関〕・二方〔福山〕・髭人參〔長田〕・酒三升卵十〔田宮〕・煙管〔福岡〕。

【原注】書翰・煙管 節齋へ

書翰・真岡綿布・詩一首 琴子へ

書翰・書幅 鵬庵へ

右 貞臣に托す

二十四日 晴

貞元〔金平〕始めて下江し、岡氏に到りて槍術を習ふ。予送りて前嶋に到る。即夜藤四郎に命じ、乗船浪華に到らしむ。

二十八日

藤四郎引取る〔以下藤四郎の話を叙す〕。

二十五日は玉造鉄砲御覧につき、二十六日に岡・大井留別に淀屋橋舟生州（いけす）『網彦』にて一酌し、その夜より船中に一宿す。藤四郎側に侍す。

二十七日 晴

折節（おりふし）客少なきにより、舟発する遅き故に藤四郎辞去す、九つ時前。舟宿『多田新』。

岡氏餞別梅肉息合い〔瓶共〕・血止め・百錢五・煮豆、大井氏は木綿一反。

五月二日

未刻、大目付中呼びに来候故罷（まかり）出る。中村助次郎部屋の外にてひそかに申し候わ、〔又一殿最早（もはや）出仕の年齢。かつ、この頃お上御多事にて御人少故に、何時お召出しに相成り候も料難（はかりがた）く候。あらかじめお目見へ相済み申さず候ては、お召出しに相成難く候。右につき、御家老中より内々吉郎へウツロイを申し置くべく。吉郎別段存じ寄りもなく候はば、来たる端午にお目見へ〕と云々。予答へて曰（いは）く。

「倅（せがれ）従来武芸稽古十分に致しおり候故、お目見へは遅きを要し候へども、これま

でお上ご無事の時とも違い候故、残念にお存じ候へども、お請けを仕（つかまつ）り候」と。予早速引取り、その義を家内に告ぐ。偶（たまたま）藤四郎来たる故にまた告るところ、

【原注】和田の叔母、また偶到る。

金平浪華より帰来し、又一二十九日〔実は二十七日〕発船の義を具（つぶさ）に告る。かつ、二十九日又一並びに岡より書状にて報じ候その書、到着否やと問ふ。その書いまだ到着なきにより、即時中村助次郎宅へ参り候ひて、又一二十九日に備中へ赴くために浪華発船し、かつ兩人書状を差出し候趣、金平より承知の由申し演（のべ）る。もつとも、七月の内に引取り候趣故、お上の御用を欠き候ことになく候間、

「吉郎即時お請けは仕り候へども、その義はお引直し下され、お目見への義暫時（ざんじ）御猶予なし下さる様に申しくれ、とお取繕（とりつくろ）ひ下さるべし」と、相頼み候ところ、助次郎承知す。その夜、関半助を豊田準宅へ呼び、三人密議す〔福山繁三郎障りあり到らず〕。

三日

早朝福山氏へ遇（あひ）て委細を話す。しかしながら、兩人の報書いまだ到来なきにつき、金平に命じ、その書を吟味のため再び浪華へ遣し候て、爾後（じご）相発し前嶋へ到る。折節飛脚『萬佐』浪華より引取り、かの書を金平へ相達し候につき、金平即時前嶋より引取る。予また即時その書を福山氏へ示し、兼て中村助次郎へ示し、その確然たるを知らしむ。

五日 晴

午前予下江、岡・大井二子を謝せんとす。晡時着岸す。その夜後藤世張を訪ふ。『檜皮屋』に宿す。

六日 陰晴

晡時岡氏を訪ふ。主人公用にて出勤、いまだ帰らず。転じて大井を訪ふ。又々不在。その夜岡にて一宿す。

七日 小雨

早朝岡主人に挨拶す。主人今日また出勤故、予また去る。晡時再来を約し置く。晡時に至り予再来し、主人また帰宅す。浴後対酌す。大井を招き、来る。岡に宿す。

八日 雨

早起大井を訪ひ、一酌して辞し去る。転じて小倉を訪ひ、一酌す。その夜『檜皮屋』に宿す。〔小倉に短刀の製を托す〕。

九日 雨

早起再び小倉を訪ひ、刀を玉嶋に送ることを謀る。辰牌後乗船し、未牌後前嶋に着く。

六月

中旬に至り、又一の信いまだ到来なきにより、一書を送り度（たく）、かつ差料の刀拵（こしら）へ出来候故玉嶋へ遣し度、亀山御用達西垣民助へ相頼み差出す。小倉宇兵衛へ向け持参候様〔飛脚『萬佐』に〕申し付る。

小倉刀をしたみ候て、西垣へ持参の都合なり。相副（そへ）る品（手紙二本、序の料紙、刀拭の紙、服当、作詩の書『詩礎階梯』ほかに二種、『衡山詩鈔』下、『今四家絶句』一二）。鉄兜の跋草稿三篇は手紙へ封じ入る。十六日早朝なり（玉嶋飛脚、渡辺橋北詰、出日二・七、『堺喜』）。小倉右の品を受取り、西垣へ持参す。西垣即ちその君の御用に仕立て、二十三日玉嶋飛脚『堺喜』へ相渡す。二十八日に着相違なき旨受け合<sub>い</sub>、その価金壹分。右西垣より申来る。差遣す。

七月六日 夕

飛脚『松源』玉嶋の一封持参す。開封のところ、節齋（書二）内君（一）葆庵（書一）中原（書一）【字欠】（書一）、ほかに小倉と富士野行き<sub>の</sub>二封あり、早々届る。勿論又一の書一封あり、即時福山・関・長田へ報ず。竹井・福岡へも。

七日

〔福山・関・藤四郎〕来る。夕方、福山・関を招飲す。

二十日

森田節齋手紙、又一手紙、『松源』相届る。又一刀七月二日恙（つつが）なく着につき、その報なり。福山・長田へ一書来る。愈（いよいよ）柳川の行あり候につき、二君より餞別として金を送り候趣なり。

二十八日

関半助金子五両持参す〔外方より取り替候よし〕。

八月六日

信を玉嶋へ通ず。

一書〔正喜撰半斤、一書琴女史へ〕

森田節齋

一書〔真岡木綿二反、金唐革〕

森田葆庵

一書〔山陽翁掛物〕

中原久次

一書〔五色氷砂糖〕

小野延太

一書

東間宗平

一書

又一

右二包に致し、藤四郎したむ。その夜『萬佐』に命じ西垣氏へ持たせ遣す。

八日

西垣氏受取書来る。

九月十八日

玉嶋より又一書到来す。

(以下八行は別紙貼付)

口上届振

私倅又一槍術執心につき、

田沼玄蕃頭（げんばのかみ）様御組与力

岡渡方へ修行に差遣し

置き、逗留中渡相談も

御座候はば、折々他向へも

罷出修行致させ申したく

存じ奉り候。此段お届け申上げ候

金五両 辰年 大江村谷禎太郎より出す。

金六両 辰年 八月出す。

金五両 辰年 十二月出す。巳年二月柳川へ着く。

金壹両一分 同四月 硯を売りその代を遣す。

安政四年巳十月二十五日、信田衛門助・松井惣兵衛同道にて柳川出立す。肥後熊本、日向延岡・高鍋・飢肥・清武にて試合す。薩州路に掛り、肥後へ出、人吉にて試合す。十二月四日滞りなく柳川へ引取り候由、申来る。

右の書十二月二十四日着く。

同五年四月六日、平部貞一・神谷柰同道にて出立す。久留米より肥前佐賀・鹿嶋・諫早・嶋原・大村・平戸・唐津と筑前福岡を遍歴し、長崎を見物し、五月十八日柳川へ引取り候由、



申来る。

右の書六月二十七日来る。

夷船の一条につき、六月二十一日京師・大坂・兵庫・堺の警衛、諸侯仰付けられ候義これあり候につき、又一引取らせ申し候期と存じ候。

七月十六日

引取り雑費金六両、柳川邸へ八蔵に命じ遣す。同夜、鈴木呼寄せ相談の所、同意す。

十七日

長田・関呼び候て申聞かせ候ところ、また同意す。

十八日

又一及び加藤父子・谷川・安部・信田・平部へ一書を遣す。加藤翁の書札を乞ふ。

十二月二十六日

又一書状藤江より到来す。十二月朔日、藤江森田まで落着き候由。

己未二月

一書到る。旧年十二月より福山藩の招に応じ、城下に滞留す。

三月に一書到来す。福藩より八人扶持賜ると云々。

三月十九日

一書到来す。命に随い来四月二日出船し、引取り申すべしと。

三月十三日

一書到来す。因州藩ならびに勝山・松山十一人福藩へ来、幾田武之進と試合と云々。

同十六日

一書浪華より到る。昨十四日着坂し、岡氏に寓す。十八日以為（おもへらく）帰期と。

右書状到来につき、知らさせ候人、竹井藤四郎・八蔵・鈴木久太郎・同春二郎・長田大二郎・福山繁三郎・高田久右衛門・和田拙斎・高階敬山・同民太郎・豊田準・和久勘兵衛・関半助・小倉藤左衛門・猪瀬浅右衛門・小森熊吉・市村謙一郎・杉浦嘉一・市村謙一郎（重出）・田宮四方助・中沢清朔・田宮良吉・杉本退蔵・斎藤有二・尾崎貞三・和田泰吉・京屋□三郎（善吉・正蔵・嘉六）

十八日・十九日

諸人を供す。和久安・豊田邦・静・福山段之助来る。

二十三日

井口大二郎へ又一引取りを告ぐる。

又一携するところ

加藤翁目録・印可（各一卷）・英名録・九州図・加藤翁書・節斎夫婦書・五十川卓助書・東馬安太郎書

(以下第二丁)

二十三日

福山侯留守居小倉□用人の書状持参にて、又一御借用と云々

二十五日

右の一条和久より承る。

二十六日

小倉氏にて推究す。

二十七日

高田・福山・高階へ通ず。

二十八日

又一風邪瘳(いゆ)るを以て始めて打槍す。

二十九日

同、この夜「鈴木氏において」春二郎と錯濫献酬す。侍する者小森。

五月朔

十一日より

指療治の為出坂し、岡氏に宿す。

十六日

拝借金子、内聞込の為知らず。高田来る。酒を出す。

十七日

田中・片岡・松井へ挨拶に廻る。

十八日

金十五両割元にて受取る。御沙汰ある節上納と云々。

六月十日

片岡源太左衛門より呼びに「書状二通示し申され、一通は福山藩より又一再逗留頼みの状。一通わその返書なり。」

福山書状写し

一筆啓上致し候 春暖御座候ところ各（おのおの）様弥（いよいよ）御堅固お勤めなされ珍重に存じ候。然ればその御藩藤井又一殿、旧冬槍術御修行のため九州より御帰路お立寄り下され候ところ、当藩槍術修行の者一同御同人へ随い、此の節まで【以下欠】

## 大意

安政二年（一八五五）三月十八日

森田節齋は、備中玉嶋への途次、細君と来訪。大坂の宿に数日逗留中、一日高槻に招いて飲む。

節齋は思いがけず、わが長男又一の望みに応じ、中国・九州への槍術修行に一肌脱ぐと言う。玉嶋の豪農中原久次に相談して、費用負担させるとか。同席の者、福山繁三郎・長田大次郎。（二十四日に節齋は辞去し、玉嶋へ赴いた）

数日後、これを関半助・田宮良吉・福岡保左衛門・竹井藤四郎に告げる。宇野謙三にも。

四月五日

又一を連れて（葉野市太郎が同行）大坂に下り、岡渡・大井良之助に告げる。二人共おどりがって賀す。北厚二にも告げる。（波多野によると大和にいらるとか）

【原注】 小倉初見、琴子の書を授く

これを知る者、岡石之助・大井佐逸・大井常二・佐伯元太郎・宮津藩士山崎左右馬・膳所藩士門間虎太郎。（五日滞在して帰宅。又一も続いて帰宅）

四月二十日 晴

ひそかに予の書齋に来訪して、又一送別の宴をすすめた者、福山・長田・関・宇野。(福山・宇野は餞別に酒肴差入れ)

四月二十一日 晴

又一を連れて田宮を訪問。宴席の場を他に借りたのは無用の気遣いと戒める。藤四郎は肴を携えてあとから来る。

四月二十二日 晴

又一は岡の連絡を頼みに高槻を出る。あらかじめ酒肴を用意して、ひそかに離杯を傾ける。

持たせた物、金二両二分・その他薬品(奇応丸・薄荷の類)。皆の餞別、金一分(関)・金二分(福山)・朝鮮人参のひげ根(長田)・酒三升と卵十(田宮)・煙管(福岡)

【原注】

書翰・煙管

節齋へ

書翰・真岡綿布・詩一首

琴子へ

書翰・書幅

鵬庵へ

右を又一に托す。

四月二十四日 晴

次男金平が、岡氏に槍術を習うため、初めて大坂に下る。前島まで見送り。その夜藤四郎に指示して、船で大坂に行かせる。

四月二十八日

藤四郎高槻に帰着。(以下四月二十七日の記事までは藤四郎の報告に基づく)

四月二十五日は、大坂定番玉造口組の鉄砲調練の日につき、又一は岡・大井の兩人と、二十六日に淀屋橋の舟いけす『網彦』で別宴を張る。又一はその夜から船中泊し、藤四郎が付添う。

四月二十七日 晴

客の少ない折で船出が遅れたため、藤四郎は九つ(午前零時)前に船宿『多田新』を辞去。

岡氏の餞別、梅肉の息合薬(瓶共)・血止め・百文銭五枚、煮豆。大井氏は木綿一反。

五月二日

未の刻(午後二時頃)に大目付の呼出しで出向く。中村助次郎が用部屋の外でそつと言うには、

「又一殿も、もう出仕の年齢だ。しかもこの頃は御用繁多で人手不足。いつお召出しになるかも知れんが、殿のお目見えが済むまで、出仕は叶いがたい。」

「ご家老の内々のご意向を申して置くが、貴殿に異存がないなら、来たる端午の節句にお目見えの運びとしては」

「せがれは従来から武芸を熱心に稽古しているので、お目見えは遅くなければならんが、お上もこれまでのような平穏な時とは違うので、残念だが、お受けつかまつる」

早速帰宅して、それを家内に告げる。たまたま来合せた藤四郎と話していると、金平も大坂から帰り、又一が二十九日（実は二十七日）に出船したことを、詳しく語る。

【原注】 和田の叔母も、たまたま来た。

金平は、又一と岡が二十九日に出した手紙の着否を訊くが、手紙は未着。急いで中村を訪ねて、

「又一は先月二十九日に、大坂から備中へ出船。書状を差出したのを、金平が承知している。」

七月に帰宅予定で公務に支障はなく、その場でお受けつかまつったが、お目見えはしばらく猶予願いたいと、お取りなし下されたい」と頭を下げ、承知して貰う。

その夜、関を豊田準宅に呼び、三人で密議。（福山は、都合悪く不参加）

五月三日

早朝福山に委細を話したが、二人の手紙が着かないので、金平を大坂へ向かわせる。折よく前島で飛脚『万佐』に出会い、手紙を受取って急いで帰る。その手紙をただちに福山に見せ、合せて中村にも見せて、又一の出発を確認して貰う。

五月五日 晴



岡・大井に礼のために、午前中に出て大坂に下る。夕方着岸。その夜、後藤世張を訪問ののち旅籠『檜皮屋』泊。

五月六日 晴曇

夕方岡訪問。主人は勤務からまだ帰らず。次に大井を訪ねたが、これも不在。その夜は岡宅泊。

五月七日 小雨

早朝岡主人に挨拶したが、出勤なので辞去し、夕方再来を約す。夕方再来。主人も帰宅。入浴後二人で飲む。そのあと大井も呼ぶ。岡宅泊。

五月八日 雨

早起きして大井を訪ね、軽く飲んで辞去。次に小倉宇兵衛を訪ねて軽く飲む。その夜『檜皮屋』泊。(小倉に短刀の新調を相談)

五月九日 雨

早起きして小倉を再訪し、刀を玉嶋の又一に送ることを相談。辰時(午前八時)過ぎに乗船し、未時(午後二時)過ぎ前島着。

六月中旬になっても又一から連絡がないため、問合せの手紙を出しかたがた、又一の刀の外装も仕上がっ

たので、丹波亀山藩の用達西垣民助に頼んで、一緒に差出すことにし、小倉に届けるよう、飛脚『万佐』に申付ける。

小倉が刀を荷造り（西垣に渡す都合で）。荷物に添えた品々（手紙二通・節齋に序文を書いて貰う用紙・刀をぬぐう紙・服当・作詩の書物『詩礎階梯』他二種・『衡山詩抄』下・『今四家絶句』一）、河野鉄兜の跋文章稿三編を手紙に同封。六月十六日早朝。（玉嶋行飛脚は、大坂渡辺橋北詰『堺喜』、発送は二の日と七の日）小倉は品物を受取り西垣に持参。西垣は亀山藩の公用便に仕立てて、六月二十三日に『堺喜』に渡す。二十八日必着と受合い、料金は金一分。西垣から連絡の通り支払う。

七月六日夕

飛脚『松源』が玉嶋便一包を持参。

開封すると、節齋（二通）・夫人（一通）・鵬庵（一通）・中原（一通）・「欠名」（一通）。他に小倉と富士野宛の二通あり、早々届ける。勿論又一の手紙も一通あり、早速福山・関・長田に連絡。藤四郎と福岡にも。

七月七日

福山・関・藤四郎来。夕方に福山・関を呼び飲む。

七月二十日

節齋と又一の手紙を『松源』が届ける。又一の刀が七月二日に無事着いた知らせ。

福山・長田にも来信。いよいよ又一が槍術稽古で筑後柳川に行くので、二人が餞別を送ったと。

七月二十八日

関半助がお金を五両持参。(どこかよそで換金した由)

八月六日

玉嶋に書信を送る。

手紙一通・(正喜撰半斤・琴子女史宛手紙) 森田節斎へ

手紙一通・(真岡木綿二反・金唐革) 森田鵬庵へ

手紙一通・(頼山陽翁の掛軸) 中原久次へ

手紙一通・(五色氷砂糖) 小野延太へ

手紙一通 東間宗平へ

手紙一通 又一へ

右を二包にして藤四郎が荷造りし、夜のうちに『万佐』に命じて、西垣へ持参。

八月八日

西垣から受取書来。

九月十八日

玉嶋から又一の手紙着く。

【貼紙】

「藩庁への口上届

私のせがれ又一は、槍術稽古に励んでおり、

大坂御定番田沼玄蕃頭様に所属の与力

岡渡方に修行につかわしておりますが

逗留中に渡から相談がございましたら、

折々は違う所へも

出掛けて修行させたいと

考えております。

これについてお届け申し上げます。

」

金五両 安政三年 大江村谷禎太郎から出す。

金六両 安政三年 八月に出す。

金五両 安政三年 十二月に出し、翌年二月柳川着。

金一両一分 同年四月硯を売り、その代金を送る。

又一から、安政四年十月二十五日に、信田衛門助・松井惣兵衛同道で柳川を出立。肥後熊本・日向延岡・高鍋・飢肥・清武で試合。薩摩街道を経由して肥後へ出、人吉で試合。十二月四日に無事柳川に帰着したと

報告。

この手紙は十二月二十四日着。

同五年四月六日に、平部貞一・神谷柰同道で出立、筑後久留米から肥前佐賀・鹿島・諫早・島原・大村・平戸・唐津と筑前福岡を遍歴し、長崎を見物。五月十八日に柳川に帰着したと報告。

この手紙は六月二十七日来。

異国船への海防強化のため、安政五年六月二十一日に、公儀は京都・大坂・兵庫・堺の警備を諸侯に下令。又一を帰国させる時期がついに到来。

七月十六日

帰国費用として六両を、竹井八蔵に命じて柳川藩邸に届けさせる。同夜、鈴木を呼び相談、同意見。

七月十七日

長田・関を呼んで相談、同意見。

七月十八日

又一、及び修行先の加藤善右衛門先生父子・谷川進吾・安部茂介・信田・平部宛に書状を送る。加藤老先生には、書面をお渡し下さるようお願いする。

十二月二十六日

又一の手紙が備後藤江から来る。十二月一日に、藤江の節齋宅に到着したと。

安政六年二月

手紙着。昨年十二月から備後福山藩の招きに応じて、城下に滞在中と。

三月

手紙着。福山藩から八人扶持を頂戴するとか。

三月十九日

手紙着。命に従って来四月二日に出船し、帰国と。

【この後、日付に混乱がある】

三月十三日

手紙着。因州（鳥取池田）藩・美作勝山（三浦）藩・備中松山（板倉）藩から十一人が福山藩に来て、幾田武之進と試合と。

三月十六日

大坂から手紙。「昨十四日大坂着。岡の家に泊まり、十八日に帰国の積り」と。

右の手紙が着いたので連絡した人々、竹井藤四郎・同人蔵・鈴木久太郎・同春二郎・長田大二郎・福山繁三郎・高田久右衛門・和田拙斎・高階敬山・同民太郎・豊田準・和久勘兵衛・関半助・小倉藤左衛門・猪瀬浅右衛門・小森熊吉・市村謙一郎・杉浦嘉一・田宮四方助・中沢清朔・田宮良吉・杉本退蔵・斎藤有二・尾崎貞三・和田泰吉・京屋□三郎（善吉・正蔵・嘉六）

三月十八日・十九日

関係する人々をもてなす。和久安・豊田邦・福山段之助来。

三月二十三日

井口大二郎へ又一帰国を告げる。

又一が持ち帰った品々

加藤老先生の目録・印可状（各一卷）・英名録・九州図・加藤老先生の書・森田節斎夫妻の書・五十川卓助の書・東馬安太郎の書

【四月か】二十三日

留守居役小倉氏が、備後福山阿部候の用人からの書信を持参して、又一をお借りしたいとの申し出とか。

二十五日

右の件を和久から承る。

二十六日

小倉の家で検討。

二十七日

高田・福山・高階に連絡。

二十八日

又一の風邪が癒えたので、久しぶりに槍の稽古。

二十九日

又一今日も稽古。この夜鈴木家で、春二郎と意識が飛ぶほど飲む。小森同席。

五月一日【日付のみで記事なし】

五月十一日から



指の治療のため大坂へ。岡泊。

五月十六日

拝借金を下される事は、内々に耳にただけで、詳しく知らず。高田来、酒を出す。

五月十七日

田中・片岡・松井へ挨拶に廻る。

五月十八日

金十五両を大庄屋で受取る。別途ご指示あるとき返納すればよいとか。

六月十日

中老片岡源太左衛門の呼出しで参上、書状二通を見せて頂く。一通は福山藩から、又一に再逗留願いたいの依頼状。もう一通はその回答書。

福山藩書状の写し

一筆啓上致します。春暖の折から、皆様には益々ご壮健でお勤めのことと、お慶び申し上げます。

さて、貴藩の藤井又一殿におかれては、昨年冬九州での槍術ご修行の帰路お立寄り下されましたが、小藩の槍術修行の者一同、又一殿に心服しており、今に至るまで【以下欠】



## 補注

### ①【森田節齋（もりたせつさい）】

森田節齋 一八一—一八八八

竹外の友人。頼山陽門下の儒者。通称謙蔵。節齋は号。大和五条の人。京都で開塾して尊王攘夷を講じた。吉田松陰は門下生のひとりである。名文家として知られ、『竹外二十八字詩』の序文は傑作として名高い。狷介な性格で、同門の儒者との間で盛んに論戦を行った。

安政二年、備中庭瀬藩主板倉家の侍医を勤める弟鵬庵を頼って、備中浅口郡玉嶋村に妻と移住した。鵬庵はもと玉嶋村の医者であり、家作があつたのであろう。翌年、備中浅口郡上成村の中原久次の私邸で儒を講じた。のち藤江村に転じ、文久元年には倉敷に転じて私塾「簡塾」を開いた。慶応元年、幕吏の追及を逃れて諸方に潜伏。明治元年、紀伊那賀郡荒見村で不遇のうちに没した。

### ②【貞臣（さだおみ）】

藤井又一 一八三六—一九一五

竹外の長男。通称又一。貞臣は名。高槻藩士。

槍術に長じ、筑後柳川に加藤善右衛門道場で修行した。幕末から明治にかけて、高槻藩の先手物頭や銃卒隊長を勤め、廃藩を迎えた。その後は公職につかず、請われて槍術を教授するなどして、大正四年に没した。

### ③【琴子（ことこ）】

森田琴子 一八二六—一八九六

節齋の妻。高槻藩士小倉某の娘。号無弦。

幼時に天然痘に罹患して、醜貌となつたと伝える。藤澤東咳の塾に寄宿して学問修行中、竹外の斡旋で節齋に嫁した。のち離縁されて高槻に戻り、明治元年に復縁したが、節齋は直後に病死した。その後上京し、有力者の家庭教師をして生計を立てた。没後は節齋の墓側に葬られた。

### ④【後藤世張（ごとうせいちょう）】

後藤松陰 一七九六—一八六四

頼山陽の京都での最初の弟子。通称俊蔵。号松陰。世張は字。

大坂江戸堀に住み、文人の社会で重きをなした。また、山陽没後の門下を中心として遺稿の整理にあつた。竹外の初めての詩集『竹外亭百絶』に跋文を寄せるなど、竹外との交遊も長く続いた。

『竹外日記』には節齋・松陰。『又一日記』には、やはり同門の牧文吉の名が見え、竹外の文人としての活動の場が、山陽一門のサークルを主体とするものであつたことが窺われる。

### ⑤【丹波亀山藩】

譜代大名形原松平家。五万石。

玉嶋に亀山藩の飛び地があつたので、同藩の公用便に便乗したのである。

各藩の公用便を、相互に利用可能だったのか。それとも、小倉宇兵衛なる人物が高槻藩の大坂留守居役（またはその関係者）で、亀山藩の留守居役に便宜を図って貰えたのか。確認の手段がないので、ご存知の方のご教示を得たい。

⑥【京師・大坂・兵庫・堺之警衛】

井伊直弼を首班とする幕閣は、安政五年（一八五八）六月二十一日、京都及び江戸湾沿岸（横浜・富津）、大坂湾沿岸（大坂・兵庫・堺）の警衛を諸藩に命じた。同月十九日に勅許を得ぬまま日米修好通商条約の調印を強行したため、当然予想される朝廷ほか各方面からの抗議を鎮静化させ、併せて人心の安定をも狙った措置で、同時に調印責任者である老中堀田正睦らを罷免した。

このとき、梁川星巖や頼三樹三郎など尊王攘夷派の活動家と親しい竹外は、「武の時代」の到来を予感したのではなからうか。藤井家の当主には、自分より又一がふさわしい……。呼戻しの裏には、竹外のそんな思いがあったように思われる。又一帰国後、竹外は早々に家督を譲り、京都での隠居生活に入るのである。

⑦【加藤翁（かとうおう）】

加藤善右衛門 一七八五—一八七一

又一の槍術の師。筑後柳川藩士。通称善右衛門。名は清房。

大島流槍術の名手。『柳河藩立花家分限帳』（柳川市）では安政五年に四十石。『分限帳』（柳川郷土クラブ）では安政六年に「隠居・隠居料二十俵・御試番格」とあるので、その頃隠居したと思われる。柳川は

槍術で知られており、特に加藤善右衛門の道場は盛んで、『旧柳川藩志』には「本邦各藩より藩費を以て加藤の門に槍術を練習せしむるもの四七五人の多きに達す。（中略）故に加藤の塾に寄宿するもの常に七・八十人、ひとりにして永きは八・九年に及ぶ」とある。尚、柳川市には、善右衛門の『旅弟子姓名録』という史料が残っており、「摂津高槻藩藤井又市」と記されている。

槍術廻国修行便覧（参考資料）



○安政乙卯歲  
安政二年（一八五五）

(001)表  
安政二乙卯歲四月

鎗術廻国修行便覽

(001)裏  
（白紙）

(002)表  
九州

筑後柳河

立花左近將監

大嶋流  
加藤善右衛門

新撰流  
吉弘伊織之助

夫木流  
佐野八兵衛

宝蔵院流  
清水太郎右衛門  
笠間司馬

新陰流  
益子右内  
不破十三郎

宿 新町肥前屋忠兵衛、同所<sub>ニ</sub>

桂宮之社あり

(002)裏柳河<sub>ヲ</sub>五里

同国久留米

有馬中務太輔

妙見自得流 井上弥左衛門

宝蔵院流 古川小平太  
深井得兵衛

同流 森 兵左衛門

宿 札辻紙屋太郎右衛門、御城下

水天宮之社あり、同所<sub>ヲ</sub>壱里半

<sub>ニ而</sub>高良山登十八丁

久留米<sub>ヲ</sub>五里

肥前蓮池



(003)  
表

鍋嶋甲斐守

種田流

村上祐治

大嶋流

成留健之進

無辺流

池田庄左衛門

宿 石川勘兵衛

蓮池方壹里半

同国佐賀

松平肥前守

宝蔵院流

石井兵蔵

同流

古瀬春之允

種田流

中川吉左衛門

(003)  
裏

姉川流

中村彦之丞  
嶋田形左衛門  
永渕惣左衛門

宿 白山町文武屋

佐賀方二里

同国小城

鍋嶋

宝蔵院流

松崎又左衛門

同流

嬉野小左衛門  
石丸 柰

宿 横町金居屋

(004)  
表  
小城方七里

同国鹿嶋

鍋嶋安次郎

宝蔵院流

西岡隼之助

宿 □国屋、同所方多良崎越

湯江之宿迄十里、此所難所、

是方諫早迄三里

鹿嶋方十三里

同諫早

諫早兵庫

姉川流 田中権助

大嶋流 藤原左右一

宿 油屋定吉

(004)裏  
諫早方七里 此間日見峠有

同国長崎

此所唐館・蘭館見物之義者

手引を以相頼候事、夫方鳴

戸場迄出船を雇、唐

船・蘭船其外諸家様之

御陣場  番所有

長崎方十里

同国大村

大村丹後守

無辺流

黒川正太夫

同 八郎右衛門

宿 片町御銚子屋

(005)  
表

同所方二里行松原、此所方

彼木<sup>へ</sup>渡海舟有吟味之事、

陸三里是方武尾迄五里、此所

止宿、武尾九里<sup>ニ而</sup>唐津、此間

駒鳴峠ヒレツル<sup>へ</sup>山有

同国唐津

小笠原佐渡守

○芥屋（けや）  
現 福岡県糸島市志摩  
芥屋

(005)  
裏

宝蔵院流 田辺覚左衛門

宿 鍋屋

当城下<sub>ニ</sub>渡越松原<sub>一</sub>出、一二里行

松原出抜又渡し有、夫<sub>ニ</sub>吉井

之宿・深江之宿行過、升江之宿

<sub>ニ</sub>かむり道相尋かむり<sub>一</sub>行、

寺山之渡有、此所陸を廻れハ

弍里、海上なれ<sub>者</sub>十丁計、賃錢六

十文位、寺山<sub>ニ</sub>茶屋道相尋

壺里余<sub>ニ</sub>茶屋、此所大戸参り

宿屋あり

唐津<sub>方</sub>九里

芥屋之宿

(006)  
表

当所方四里余<sup>ニ</sup>而今宿之駅、

夫方生之松原へ掛り、入口方

三丁計り右方十間計入込

生之松、石之玉垣之内<sup>ニ</sup>有り、

松原出ぬけ二丁計行、左手

浜へ出御膳立之石有、夫方

三丁余行橋越飛石渡り、福岡

大名小路<sup>江</sup>出行過、中嶋泊

夫方八里

筑前福岡

松平美濃守

妙見自得流 井上兵左衛門

高田派

宝蔵院流

高田逸之助

(006)  
裏

同所方博多之町打過、半道

余<sup>ニ而</sup>箱崎八幡宮 所浜

方之中道眺望、夫方式十丁

計松原行ぬけ、渡し越四丁

計<sup>ニ而</sup>鳥弁天、此所海之

方<sup>へ</sup>石段下り浜<sup>へ</sup>鳥居有、

是方右<sup>ニ</sup>取五十間行、少シ之

八十廻り岩根<sup>ニ</sup>狐柱石有、

七メ<sup>ニ</sup>折、塩満たる節<sup>者</sup>海<sup>(ツカ)</sup>

中、夫方以前之道を箱崎<sup>へ</sup>

帰り、産八幡之道相尋八幡

宮着、宮之左<sup>へ</sup>入込うふ湯

之水有り、夫より宝満

山根行太宰府三条

(007)表  
に出る是二里、都合七里

福岡方七里

同太宰府

当所ノ口観音寺小野東風

之筆跡有り、天狗山同所<sub>ニ而</sub>

相尋候事、夫方六本松越

通り秋月<sub>江</sub>六里

同秋月

黒田甲斐守

自得流 伊藤朽索

鏡知流 吉村武太夫

当所方小倉迄二日路



(007) 裏下関方海上三里

豊前小倉

小笠原左京大夫

宝蔵院流 後藤駒之助

当所より三里半<sub>ニ而</sub>寒田宿、四里

半<sub>ニ而</sub>椎崎之宿、二里<sub>ニ而</sub>蜂屋之宿、

三里<sub>ニ而</sub>中津、寒田うし嶋迄

渡し海有、海上九里賃銭

壺貫文、うめ嶋方中津迄

一日位

小倉方十三里

同中津

(008) 表

奥平大膳大夫

風伝流 津田逸蔵

種田流 才葉甚助

本間流 横山幸三郎

宿 米町子<sup>(ママ)</sup> 屋、当所方老里

半<sup>ニ而</sup>植野、二里<sup>ニ而</sup>四日市、

老里<sup>ニ而</sup>宇佐八幡、三里<sup>ニ而</sup>

立石、宇佐方之里五十丁老里也

中津方八里 但し五十丁老里也

豊後立石

当所方かな越峠越日出<sup>へ</sup>四里、

此道山道谷道難所

(008)  
裏

森方十三里

同日出

木下主計頭

古新達集

藤井權藏

神明流

宝蔵院流

菅 仙助

此所<sub>ニ</sub>松寺卜云寺<sub>ニ</sub>無双之大

なる蘇鉄有、当所<sub>方</sub>一日<sub>ニ而</sub>小

浦宿、三里<sub>ニ而</sub>利府、此間石

原道極難所也、三里<sub>ニ而</sub>

府内、此所渡し海舟有

海上三里

(009)  
表

宿 宇佐美 大手前

同杵築

松平市正 此所槍術不出来

同府内

松平左衛門尉

鏡知流 太田 登

無辺流 市川又吉

宿 竹町音羽屋正六、同所方犬

飼之宿迄五里、夫方岡迄八里、

府内方臼杵<sup>へ</sup>七里

(009) 裏府内方十三里

同岡

中川修理太夫

大嶋流 松原庫太

鏡智流 杉原順助

佐当流 池田嘉吉

宿 笹屋孫助、同所方九里<sup>三而</sup>

野津市、夫方四里ニ而白杵

同白杵

稻葉富太郎

五人先生有

種田流

上川平一郎

四人先生有

宝蔵院流

三村四郎兵衛

(010)  
表

宿 萬屋、同所方佐伯迄七り

山坂有

同佐伯

毛利安房守

宝蔵院流

長屋 悟

鏡智流

佐伯方一日路 里数不知大難所

日向延岡

内藤能登守

大嶋流  
加藤三婦

種田流  
小曾戸源太夫

神精流  
吹屋両水

(010)裏  
同所方八里美々津之駅

同高鍋

秋月佐渡守

種田流  
石井進

月  
自山流  
山崎慶次郎

宿 福田屋

高鍋方二里

同佐土原

嶋津淡路守

白山流 杉尾民五郎

大嶋流 田原勘九郎

同飢肥領 清武

(011)表  
旅川流 斎藤膳内

清武方八里

同飢肥

伊東修理太夫

旅川流 川崎縫之助

無辺流 阿萬与次右衛門

宿 本町河野小兵衛、同所方宇都山へ

三里珍所也、飢肥方干野峠を越し  
(牛丸)

都之城へ止宿、此干野峠わ三月方  
(牛丸)

八月迄わあぶ・ひる多し誠難所也、

都之城迄十里、是方人吉迄

二日路、間里数・宿不知、又同所方高

(011)  
裏

千穂路江行わを(往還)かん延岡へ

帰る

飢肥方二十里

肥後人吉

宝蔵院流

田代忠左衛門

種田流

恒松郷平

当所方佐浦之駅迄八里、八代

人吉方十六里

同八代

長岡帯刀

宝蔵院流

河比次郎太



同 三重弥左衛門

礮野流 志水嘉兵衛

(012)  
表

宿 三国屋、当所名物長寿湯卜

申ぎやまん之風呂屋有、九州

第一之風呂也

八代方六里

同宇土

細川豊前守

宝蔵院流 官 実

礮野流 伊藤伴蔵

宿 糶屋、当所城下方三四丁登、

小西摂津守城跡有

宇土方四里

同熊本

細川越中守

(012)  
裏

宝蔵院流

富田十郎左衛門

同流

南部旗右衛門

壱岐新陰流

田中甚兵衛

礪野流

礪野伝助

宿 今京町八国屋嘉四郎、同所

清正大神儀社有、是方十一里

<sup>三而</sup>南之関駅、此所関所

有、此関所方五里手前山鹿、

此所<sup>三</sup>温泉有

一肥前嶋原へ渡海わ熊本川尻方

海上七里、此所之海上極々難所

(013) 表

二而、多わ難船いたし候間乗

不申事、又熊本城下より一日路

二而永洲村ト云所有、是より嶋原

渡海至<sub>二</sub>而静也七里、又柳河より之

海上わ十八里、柳河より永洲迄之陸七

里、又肥前佐賀より渡海廿里位

肥前嶋原

松平主殿頭

竹内流 板倉八左衛門

檜原流 奥山常右衛門

宝蔵院流 松平孫十郎

(013) 裏

宿 諸国屋、此所より会津迄八里、関所

有、此御番所<sub>二</sub>而往来切手相改、持参

無之節一切通し不申、是方

三丁計行三軒茶屋、此所<sub>二</sub>而長

崎屋相尋八里、又会津方諫早<sub>へ</sub>

三里

#### 四国

大坂方舟路五十里 舟賃二朱

讚岐多渡津

京極壹岐守

金毘羅、当所方八里行間之

宿河野駅、西条迄十里

金毘羅方十八里

伊予西条

(014)表

松平左京太夫

新大嶋流

岡斧三郎

古大嶋流

服部半助

西条方壹里半

同小松

一柳兵部少輔

一旨流

佐伯孫太夫

宿 今治屋

小松方六里

同今治

松平駿河守

疋田流

川上武八郎

(014)裏

佐分利流

野崎治助

今治方十二里

同松山

松平隱岐守

疋田流

猪田九右衛門

改撰流

長源五兵衛

種田流

先生不知

宿 富士屋

松山方八里

同新谷

加藤大藏少輔

佐分利流

大野庄五郎

新谷方壹里

同大洲

○長門府中  
現山口県下関市長府  
地区

(015)  
表

加藤遠江守

無辺流

不破吉五郎

宿 藤屋

同字和島

伊達遠江守

檉原改撰流

松井武左衛門

宿 嶋屋武助

中国

下之関方式里

長門府中

毛利甲斐守

自得流

三上豊後平

宝蔵院流

中村十郎左衛門

(015)  
裏

宿 油屋

同所方河原駅迄九里、宿屋寅蔵、

是方萩迄八里

府中方十九 (ママ)

同萩

松平大膳太夫

宝蔵院流 岡部右内

同流 小幡源五左衛門

夢想流 横地七郎左衛門

宿 河原町山下七郎右衛門、同所方

山口之駅迄五十丁壹里ニテ

七里、此道難所多し、是方徳山

迄十里、内四里わ五十丁壹里、本

(016)  
表



海道宮市へ出ル

萩方十七里之内五十丁道十一里

周防徳山

毛利淡路守

種田流 古志貞太

大嶋流 三芳初之進

宿 油屋町吉屋弥兵衛、同所方

九里行、くか(玖珂)駅方右へ取岩国道、

萩方須佐・浜田・津和野江入わ同所

三而相尋申候事、右三ヶ所稽古出来

申候得共、入込三相成候

(016)  
裏

同岩国

吉川監物

宝蔵院流 田中栄蔵

一旨流 朝枝善之助

宿者目代 江相尋申候事、

当所方新湊へ壺里、夫方芸州宮

島へ渡海七里、此所日本三景也、

宮島方広島へ渡海五里

岩国方海陸十三里

芸州広島

松平安芸守

(017)  
表

佐分利流 嶋末源太

行学流 管鎗 田邊幾衛

新陰疋田流 小谷武左衛門

宝蔵院流 佐久間藤太郎

○柞原  
現広島県三原市

宿 金山町大竹屋治三郎、同所方

壱里半行海田市駅、夫方右<sub>江</sub>

分れ六里半<sub>ニ而</sub>間之宿内海<sub>へ</sub>

出る、此所方夜舟<sub>ニ乘</sub>、備後三原・

糸崎両所<sub>へ</sub>着之儀船頭<sub>へ</sub>

相談之事、海上十里

広島方海陸十八里

備後柞<sub>み</sub>原

(017)  
裏

浅野甲斐

佐分利流 佐分利貫之助

宿わ先生方指宿也

同所方今津迄七里、是方神

辺迄四里、両所之内止宿之事

三原方里数不知

備中庭瀬

板倉撰津守

疋田流

大河内又七

庭瀬方三里

備前岡山

松平内蔵頭

坂口流

萩野元之進

疋田新流

水戸文左衛門

種田流

上野萬太郎

種田流

埴儀左衛門

同流

長岡三蔵

佐分利流

谷弥平次

(018)  
表

香取流 香取七之進

宿 京橋南詰中之嶋姫路

屋助次郎

岡山方一日路 里数不知

備中足守

木下備中守

種田流 津田佐右衛門

足守方一日道 里数不知

同松山

板倉周防守

(018)  
裏

種田流 幾田藩之助

檜原流 黒野定八郎

松山方八里 難所

同新見

関但馬守

種田流

新見方八里半 極難所

作州勝山

三浦備後守

大嶋流

加藤右門

種田流

北村前後

宿 横町吉井屋庄蔵

同津山

(019)  
表

松平越後守

雲平流

川上半八郎

自謙心勝流

細川唯右衛門

宿 紙屋助右衛門

津山を二日路 十二里内五十丁四里

播州三日月

森伊豆守

祭神流 川端老之助

宿 たこの町魚屋和吉

三日月を七里

同龍野

脇坂淡路守

日下一旨流 服坂 巖

(019)  
裏

宿 大手前新宮屋太郎兵衛

龍野を五里

同赤穂

森越中守

種田流

飯尾精之進

宿 寺町東保屋甚七、当所華言寺(岳力)

義士木像・墓有、城内大石

屋敷跡有

赤穂(五)へ七里

同姫路

酒井雅楽頭

此所稽古不出来、当所五二里行

御着駅、夫五二十丁二而曾根

之松、廿八丁二而石宝殿、又

壺里余二而高砂二至、夫五二里

尾上之松、二里二而本海道へ出る、

(020)  
表



夫<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>二里半<sub>ニ</sub>明石

同明石

松平兵部太輔

風伝流 関雇次郎

同流 森本小十郎

宿 山本屋吉右衛門、同所<sub>方</sub>二里半

行人丸之社、同所<sub>方</sub>町中忠友<sub>(度力)</sub>

友之墓<sub>(衍力)</sub>有り、夫<sub>方</sub>舞子

之浜<sub>過</sub>而一ノ谷敦盛之

(020)  
裏

墓有り、一里余<sub>ニ</sub>而須磨寺

青葉之笛有、三里<sub>ニ</sub>而兵庫、

町はつれ湊川越楠公之墓

有、十五丁<sub>ニ</sub>而生田之森箴之

梅有、夫方十八丁<sub>ニ而</sub>布引之

滝有、又二十丁<sub>ニ而</sub>摩耶山

遠見風景宜し、三里<sub>ニ而</sub>

西之宮、此所止宿、二里<sub>ニ而</sub>

尼ヶ崎、夫方三里行大坂

付  
録

藤井竹外邸及跡碑位置図

槍術廻国修行便覧図



# 藤井竹外邸及跡碑 位置 図

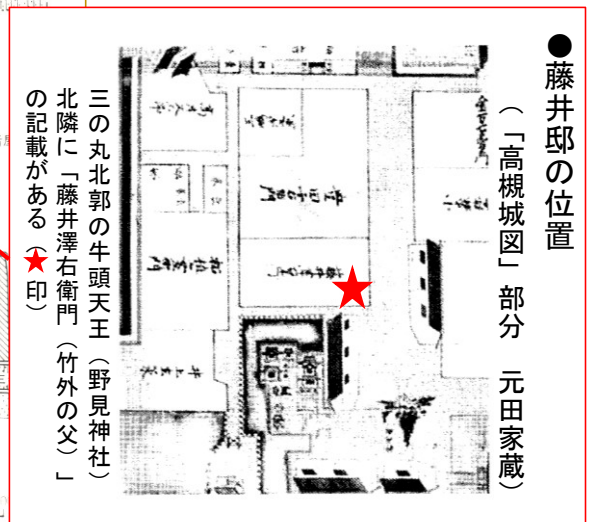
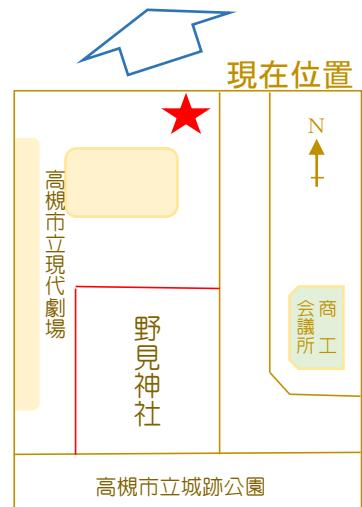
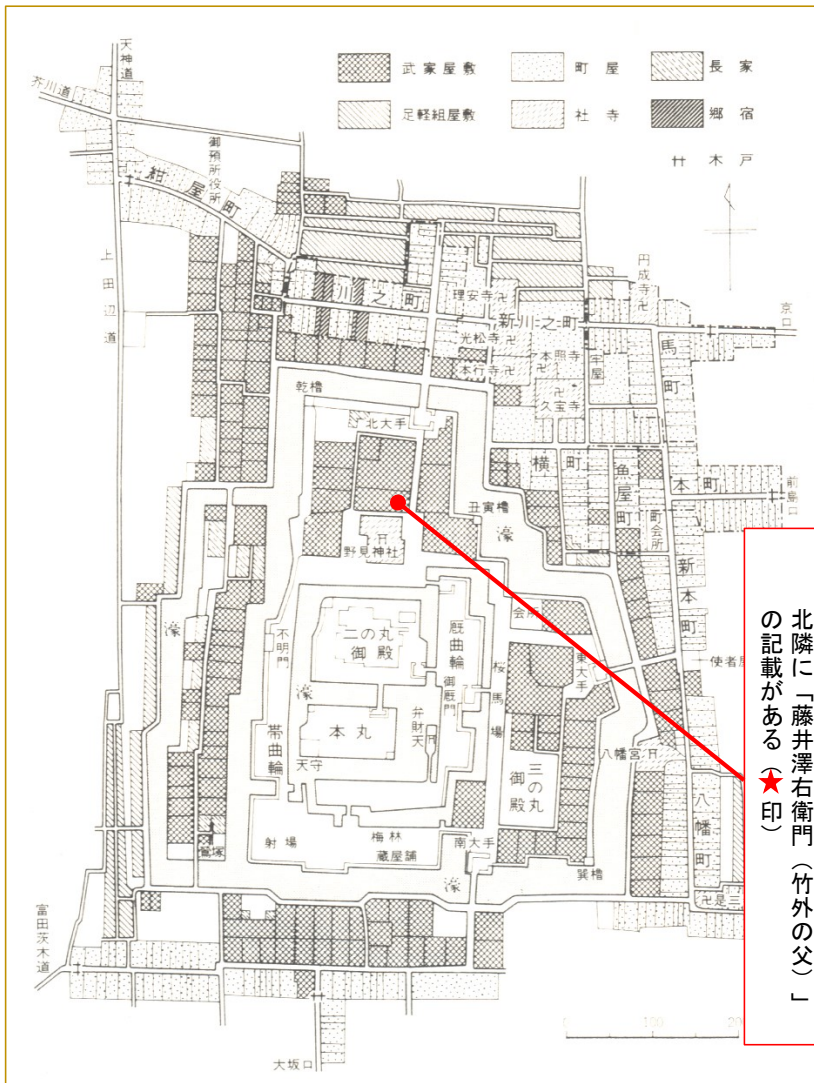
**藤井竹外**  
1807~1866

桃花水暖送輕舟背指孤鴻  
欲没頭雪白比良山一角  
春風猶未到江州 竹外

「花朝、澱江を下る」  
桃花 水暖かにして 輕舟を送る  
背指す 孤鴻没せんと欲するほとり  
雪は白し 比良山の一角  
春風なお未だ江州に到らず



## 高槻城下の図



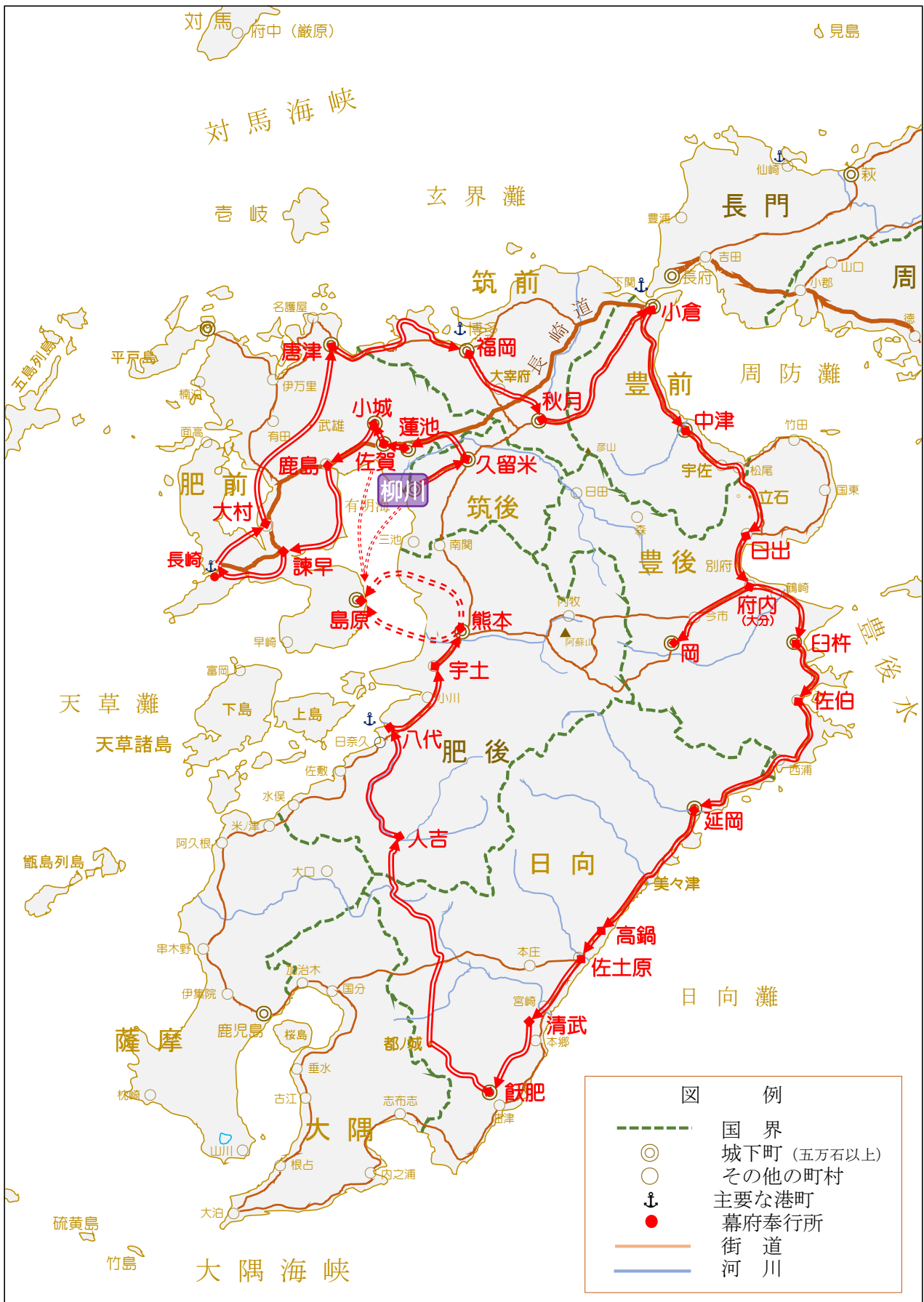
※これらの図は『高槻市史』及び『高槻が生んだ幕末の漢詩人 藤井竹外』（高槻市立しろあと歴史館発行図録）により加工作成したものである。



# 槍術廻国修行便覧 (九州)

凡 例

- ⇔ 槍術流派のある地
- ⋯⇔ その他の海上路等



凡 例

- 国 界
- ◎ 城下町 (五万石以上)
- その他の町村
- ⚓ 主要な港町
- 幕府奉行所
- 街 道
- 河 川

※本地図は、平凡社発行『世界大百科事典 日本地図』(1970)の「江戸時代の日本」を加工・加筆し作製したものである。





藤井竹外 藤井又一日記 上

編者・発行者

特定非営利活動法人

高槻市文化財スタッフの会

古文書グループ

平成二十七年三月三十一日発行

